

# 大和医学と大和整体の概要

## はじめに

これまでに幾度となく、HP上で「大和整体とはこういう療法です」といった説明を重ねてきました。先代の師（堀江糾医師）に「広める」と言われ、後進への指導と同時に、この場でも「大和整体とは」と伝えたいと考えたためです。しかし実際に書いてみると、後で「うまく伝えられていない」と感じ、書き直すことの繰り返しです。その結果として、HPに載せること自体をやめてしまいました。

ただ最近になり、「自分なりの大和整体」がまとまったと感じたこと。また以後の指導の基盤となる書籍（テキスト）を完成させたことで「自分の中の大和整体」が一段落となりました。すると、自分が還暦近い年齢になったせいもあるのですが「私に何かあったら消えてしまうもの」を考えるようになりました。つまりは「残すべきもの」を書き残そうと思っただけです。

もちろん大和整体という療法・技術については、指導の中で直接伝える

しかないものです。しかしそれとは別に、より多くの方に「大和整体（その母体となる大和医学）」という療法が存在する」ということも伝え残しておきたいと思い、浅く広くではありますがここに書き残すこととしました。ただし今回、この場で書いておきたいのは「大和整体という療法の説明」ではなく、「大和整体を通じて書き残すべきと感じたもの」です。「古くから伝わるもの」を継ぐ立場にある者として、幾分かの方に目を通して頂けると幸いです。

## 一 大和医学について

「大和整体とはどういう療法か？」を説明するには、先にその母体たる大和医学について説明しなければなりません。大和整体というのは、大和医学に属する「用食療法」「用薬療法」「用体療法」「用具療法」という四つの療法のうち「用体療法」を体を用いて治す」の別称であり、その考え方は母体である大和医学に帰属するものです。

大和医学は、群馬県新田郡を原点とした源氏の後裔であった「新田堀江家」に、八五十年にわたり受け継がれてきた伝承医術だそうです。これは私は先代の堀江糾（ほりえただし）（医師（以後は師とします）より引き継がせて頂きました。私が教わった当初で八百五十年という話でしたので、現在では八百八十年となるでしょうか。そしてこの伝承医術の目的は、「多く人を癒すこと」ではなく「その武家の長子を生かすこと」にのみ用いられてきました。武家にとって重要なのは「家の継続」です。そのために次男が医術を継ぐという習わしだったそうです（近代では次男は皆医師となる）。大抵の医術・療術が「多くの人を癒す」ことを目的とするのに対し、「長子という一人の人間」に対象を絞るといふ考え方は、現代人の感覚からすると異質ではありますが、これには「秘伝（他に漏らさない）」という意味も含まれます。この「対象を個人に絞る」といふ考え方が、大

和医学・整体の特殊性と言えます。

大和医学は中医学の影響を受けて成立したらしいのですが、結果として出来上がったものは中医学の対局を為すものとなります。大和医学の理論・独自性を最もよく表すのは、中医学の「陰陽五行」に対する「経緯四行」といふ考え方です。これは私なりの解釈ですが、「陰陽五行」というのはまず「陰陽」の部分が、一般的な陰陽図に見られるような「完全なる循環」を表すのだと思います。いわば陰陽の一言に「世界の在り方」そのものが表されているようなものです（この辺りは太極拳の先生に中国思想として深く教わりました）。そして「五行」の五という数字は、古代の数字にとつて「終わり・完全」を意味します（全ての事象は一から五の数字だけで表せるという考え方）。世界は陰陽の在り方を五つに区分し、そこにすべての事象（人の体の好不調をも）を当て嵌めていく。これが陰陽五行の目指したものだと思えます（あくまで私見と捉えて下さい）。

対して「経緯四行」の経緯というのは「経と緯」、陰陽のような二極の意味を孕みつつも、時には交差し（経度と緯度）、「物事の経緯」などと使われるように時間的な意味も孕みます。二極から始まりながらも、そこに立体的な広がりを持つ表現となります（師はよく中医学は平面的・大和医学は立体的であると話していました）。そして四行というのは「広がり」の数です。生物の細胞は一つから二つ、二つから四つと分化していきます

が、それが「四」という数になって「面」形となり、「東西南北」「上下左右」「春夏秋冬」といった世界の多様性を表すものとなります。そして四は八へ、八は十六へと際限なく広がっていきます。陰陽五行の「五」を終わり「閉じる数」とすれば、四は「広がり数」というわけです。

この違いを私は「世界と個（人）個人」というものの捉え方の違い」としています。人というのは十人十色・多様です。これを捉える方法として、中医学は先に「陰陽五行」という枠組みを作り、その中で多様な個を分類・整理しようとしたのだと思います。これを一言で言えば「世界があるから個がある」という考え方です。対して「経緯四行」は先に「個ありき」です。個人の多様性、まずはこれを「経緯」という広がりの中に落とし込み、それを「四行」という枠で整理しつつも、そこにさらなる広がりを持たせます。唯一無二の「個」というものを理解するために、世界の概念をここまでも拡張するといった考え方だと思って下さい。こちらを一言で言うなら「個があるから世界がある」となります。先に世界の枠組みを作り、そこに個を分類・整理することで個の在り方を捉えようとした陰陽五行。あくまで個を深く理解することに固執し、そのために世界の概念を際限なく広げた経緯四行。どちらをも「個」を理解するための方法論ですが、見ている方向は全く逆となります。

ここまででの説明でも何となく伝わると思いますが、経緯四行という考

え方は非常に感覚的で曖昧なものです。陰陽五行というのは、その考え方を誰もが共有できる「客観性」を備えています。経緯四行にはそれがありません。「本人だけが分かっている方がいい」という、至極「主観的」な概念なのです。そもそも「長子のみが対象」「一子相伝という環境」なのですから、そこに他人に理解・共有して貰うための「客観性」は必要ありません。「ただ目の前の人を深く理解する」ための理論体系なのです。

ただ、こうした考え方は「唯一無二の個」を理解する方法として有効ですが、弊害もあります。中医学は、陰陽五行という枠組みの中に「個」を落とし込むことで「診断→治療法」という定型な形を持ちます。これは「診断が定まれば治療法も定まる」ということです。対して経緯四行は、  
三  
唯一無二の個を理解するため、「診断」の範囲を著しく拡張しているのです。それが「治療法」に直結しないのです。つまり診断するための方法論は多彩ですが「治す方法は別」というわけです（私はこれを「投げっぱなしシヤーマン」と呼んでいます）。大和医学はとにかく「個の理解」に重きを置く医療体系なのですが、その背景にあるのが「個の特異性」という考え方です。

師はよく「わたしとお前では体も考え方も感じ方も違うんだ、わたしの真似をしても意味はない」と口にしていました。相手（患者さん）が唯一無二の個なら、こちらも唯一無二の個というわけで、診断にも治療法にも

定型的な決め事があまりないのです。人の体は皆違います。似たような症状に見えても、その背景は人によって大きく違うわけで、「一つとして同じ体、同じ愁訴は存在しない」という考え方が大和医学・整体の出発点です（これは施術者側にも言えること）。

大和医学は「感覚的」「主観的」な部分に多くを頼る理論体系です（その時点で理論とは呼べない気もしますが）。その点でも、中医学のような「客観的な正当性を持つ理論体系」とは対極にあるのだと思います。ただそこには「理論化・言語化することで失われてしまうもの」を嫌い、敢えて「曖昧なものを曖昧なままに」「感覚的なものを感覚のまま捉える」という要素を大切にしたいという背景も見てとることができます。

## 一一 大和医学の背景

実は「大和医学（大和整体）」という呼称は、近代になってから作られたものです。これは大和医学に限った話ではないのですが、古くに作られた技術体系にはおおよそ「名前がない」「というものが多く有ります。その古々の基準となるのがだいたい「戦国時代まで」で、それ以前のものには名前がないものが多いのです。これは私の考えですが、「名前がない」との理由は主「二つあります。ひとつは「名前を付けることで失われてしまうもの」を恐れたこと。もうひとつはその技術の継承が「一子相伝」であったことです。

何かに名前を付けるということは、それまで「五感のすべてを使って認識していたもの（認識し続けているもの）」に、便利な「ラベル」を貼り付けるような作業です。これはある人と仲良くなった時に、そこで「名前を知っている」「<sup>①</sup>名前を知らない」では、その理解に大きな差がでると書けば分かるでしょうか。「名前」をえ定まっていれば、その名前というラベルに次々といろいろな言葉を貼り付けていくことで、その人の印象を固定することができます。しかし名前を知らないだけで「あの白い帽子の人」とか「物腰の柔らかい人」といった、様々な印象を用いてその人をイメージせねばならないわけで、その時の印象というのは常に流動的なものとな

ります。「名前」というラベル付けは便利ですが、その過程で失われてしまうものは多く有ります。名前というのは「対象全体」の一部を特定するものであり、決して対象全体を表すことはできないからです。

加えて、技術の伝承が「一子相伝」であれば、そこに言葉は不要です。一対一なら「あれ」「これ」ですべてが足りてしまつからです。言語化というのは、一対多数において大きな意味を持ちます。言葉<sup>②</sup>名前による「共通認識（約束事）」があればこそ、複数の人間で様々な事柄を共有できるからです。ただしそうした理解は総じて「浅く広く」となりやすいものです。言葉（名前）を介さず、感覚的ものを感覚のまま伝える（深く狭く）。それでしか正しく伝わらないものは多いわけで、それ故に正確な伝承には「一子相伝」という環境が不可欠となります。

冒頭でも書いたように、大和医学は「用食療法」「用薬療法」「用体療法」「用具療法」の四種で構成されるのですが、この順序はそのまま重要性や優先順位でもあります。体の働きを「食」で整えることを最良とし、次に「薬」、それらで不足な場合に「体<sup>③</sup>体を用いた療術」や「具<sup>④</sup>道具を用いた療術」を行うと考えます。ちなみに、用薬療法の「薬」というのは生薬限定となります。師曰く、中医学は生き物の死骸（植物や動物の死骸）を使うが、そうした生き物というのは死後に「毒」を発するのでそうです。

大和医学ではこの毒を避けるべく、鮮度の高い生薬のみを用いるとのこと

でした。ただしそうした生薬の素材も、現在では殆ど手に入らないと師は嘆いておりました。

こうした理由で私は大和医学のうち「用薬療法」を教わっていないのですが、これは「用具療法」も同様です。用具療法について、師は殆ど言及しませんでした。恐らくは中医学の鍼灸を筆頭とした道具を用いる諸々の手法なのだと思うのですが、師がそれを行う姿を見たことがありません。師はとにかく「食」を重視しており、それで「ことを最良としました。」薬||生薬「が手に入らない現状では、「食」とそれを補う「体」、この二つで大抵が事足りていたようです。実際に師の施術（用体療法）は私からすれば「異次元の完成度」であり、「体」でできることの幅が「具」よりの遙かに多かったのだと思います。これはもちろん「具」を用いた施術を下に見るということではありません。師が「体」を得意としていたのだと思います。こうした理由から、私に話すことができるのは大和医学のうちの「用食療法」と「用体療法」に限られるのですが、その話に入る前に少し遠回りをさせて頂きます。

療術に限らず、武術などでも同時代から継承されている「名前のない技術体系」というものは複数存在します。そしてそのどれもが、似たような年代から発生しているという不思議な共通点を持ちます。なぜその年代に多くの技術体系が揃って確立したのか？（ここからは私の憶測となるの

ですが、そうした年代というのは「武家が力を持ち始めた時代」となりま

す。それ以前の長い歴史の中でも、「才ある者から生まれた優れた技術体系」「長い年月をかけて練り上げられてきた技術体系」は数多くあった筈です。しかしそれらは大抵「個（個人）」に依存する者だったのだと思います。これは「野」と言い換えても同じことですが、そこらに「すごい人」はいたのでしょう。これが「武家」が成立し、そこに多くの「力」が収束するようになると、武家はこそってそうした「野の才人」を集めた（抱えた）のだと思います（あらゆる才を集めることで武家の力を強める）。そこでそれまでの「野」にあった多くの才「が、武家という組織に守られ、より明確な「形」を成していっただと思つたのです。用食療法なら「食の才に秀でた者」、用体療法なら「体を扱う才に秀でた者」というわけです。

六

優れた技術というのはもともと「才ある者の独特な感覚」に依存しているものです。これを「多くの人間に伝える」ならば、言語化による知識の共有は有効ですが、それは「浅く広く」としかなり得ません。正しく伝えるためには「一対一」という環境の中で「感覚的なものを感覚のまま伝える（言語化は必要最低限に留める）」ということが不可欠となります。これは技術の継承が一子相伝でなければいけない背景でもあります。ただそれも先代までの話で（師の代までは「口伝」のみで伝えてきた）、師はこれらを「遺す」ために、可能な限り口伝の内容を文章化してくれました（これは書籍「原初・大和医学」の中に纏められています）。

### 三 大和医学の用食療法

大和医学の中核を成すのは「用食療法」食です。ただしその中身は、皆さんが期待するような「食に関する特別な理論」があるわけではありませんが。幾つかの基本となる考え方は存在するものの、その大部分はいわゆる「お婆ちゃんの知恵袋」的な知識、その集まりです（これは「健康短文集」という括りでもとめられています）。それらは次のような文章の集まりで、大和医学独自の考えばかりというわけではありません。

#### 四季養生

春は	苦味な	もので	夏を	養い
夏は	塩味な	もので	秋を	養い
秋は	酸味な	もので	冬を	養い
冬は	甘味な	もので	春を	養い
土用は	辛みな	もので	四季を	養う

先の「武家に力が集まる」という話からすれば、「それまで野（民間）にあった食の知識をかき集めた」といったところなのでしょう。野にあった「食の経験」によって培われた知識」。これをひとつひとつにまとめ、以後の長

い年月でその取捨選択を行った結果として残ったものが、大和医学の用食療法ということになるのだと思います。そうした意味では、用食療法の中身の多くは皆さんもどこかで聞いたことがあるような内容が多く含まれています。ただしそうした中にも大和医学なりの「核」となる考え方は存在するわけで、その代表的なのが次の「飽」となります。

#### 飽

人体は 数えきれないほどの 不可思議な能力を持っています  
其一つ 飢える事に対しては 奇襲でも完全整備されています  
所が 飽食に対する備えは 身体中で何処にも見つから無い

つまり、体にとって「飢え」はなんら恐いものではなく、本当に恐いのは「食へ過ぎ」であるということです。これを野生動物に例えるなら、食へ過ぎで動きの鈍った獣がいたとすれば、その獣は襲われても「逃げられない・勝てない」となるので、次は自分が餌になるしかありません（生存競争で生き残れない）。だから動物は「動ける余裕」を残すために、必ず食を「腹六分」に留めます。生き残るための選択として「食へ過ぎ」はあり得ないのです。「食へ過ぎ」をするのは人間と、その人間に飼われている犬猫くらいです。そして実際に多くの人の体の不調の背景にあるのはこの「飽」です。

「ここまで」は「飽」を分かりやすい「食べ過ぎ」に置き換えて説明しましたが、「飽」の正しい意味は「余計な食（本来は不要な食）」の全般です。食べ過ぎはもちろんです。他には「お腹が減っていなくても時間で食べる」といったタイミングの問題もあります。「お腹が減った」というのは、体の側で「消化吸収の準備が整いましたよ」というサインです。それを「お腹は減っていないけどお風だから食べる」とすれば、それは体の側に準備が整っていないのに食べるということなのです。「まだ先の食事からの栄養が足りている」「先の食事で胃腸が荒れてしまったので修復している」「体の機能に問題が生じていてその修復に全力を注いでいる（食事の消化・吸収にまわす余力がない）」などの理由から「お腹が減っていない」のに食事摂れば、それは体にとって負担にしかありません。本来、体の栄養源である食も、体の事情を無視して摂取すればそれは「毒」になりかねないのです。

私がこの説明によく用いるのが「調味料なしでキャベツを食べる」です。本当にお腹が減っていれば、ただのキャベツでもそこに甘みなどの「味わい」を感じる事ができ、調味料なしでもある程度は食べられます。しかし「相応にお腹に溜まった」となれば、もう美味いとは感じないのでそれ以上食べられません。これが野生動物の「腹六分」の感覚です。現代人は調味料などの「味刺激」で食べる感覚に慣れてしまっているのです。「体の感覚に従って適量を食べる」ということができなくなっているのです。

次に核とするのは「民族性」です。どんな民族も、限られた食の環境に順応することで長い年月を生き延びてきました。例えば「獣の肉」が豊富に取れる地域では、長い年月をかけてそつした食事に適した体が出来上がります（肉を消化・吸収するのが得意な体となる）。獣は少ないが農作物は育つ地であれば、その地で育つ農作物に適した体となりますし、肉も取れず作物も育たないが牛は育つという地であれば、乳製品に適した体となります。こうしてどの民族も、その地の食生活に適応できる体を、長い年月をかけて作り上げてきたのです。しかし現代ではそつした「体にあった食生活」という概念も失われつつあります（日本人の食事の欧米化など）。

師曰く、日本人のように「米が主食」の民族は、米ばかりを食べ続けることで体内に「米を分解・吸収するための酵素」が体質的に増えるのだそうです。つまり「米から栄養を摂ることが得意」となるのです（少ない労力で多くのエネルギーを得ることができる）。そつした日本人が「肉主体の生活」をしても、それを分解・吸収する酵素が多くないので、結果的に「あまり栄養を吸収できない」となってしまう（腸内腐敗などの弊害の方が大きい）。ましてそれが「今日はラーメン」「今日はパン」「今日は肉」「今日は米」などと分散してしまうと、そこに「特定の酵素が増える」という要素がないので、「何を食べてもあまり消化・吸収ができない」という状況となってしまうのです。

いまの日本の食文化の中心にあるのは「栄養信仰」です。「いかに多くの栄養を摂るか」ばかりが重要となり、そこに先の「飽」や「民族にあった食」という考え方はすっかり抜け落ちていきます。大和医学では「食べたものを消化・吸収する」という工程は、そこに「膨大な体力」を消費する大仕事と考えます。私たちは栄養Ⅱエネルギーを補充するために食べるのですが、その食べる（消化・吸収）という作業で膨大なエネルギーを消費しては本末転倒です。重要なのは「いかに少ないエネルギー消費で多くの栄養を摂取するか」であり、そこで重要となるのは「食べ物の栄養価の高さ」ではなく「体の状態と食事との相性」です。こうした考えを前提とするなら、「余計に食べる」というのは、ただ体に余計な負担をかける（体を壊す）だけの行為となるのです。最後に、大和医学が推奨する日本人の「理想の食」について載せておきます。

#### 長寿八香

旬を大切に	して	穀類を基本に置き
発酵物を必ず取り		豆類を中心にして
海藻類を卓に載せ		よく噛んで食して
華に走らず		粗なるべくして
腹八分を良として		六分にて長寿なるべし

## 四 療術の起源について

ここから話を大和整体に移しますが、それには少し遠回りな説明を済ませておかねばなりません。大和医学を構成する「用食」「用薬」「用体」「用具」の四種は、「食と薬」「体と具」に分けて考えるべきものです。食と薬というのは、それまで野にあった多くの知恵をかき集め、それらを長い年月かけて精査したものです。対して「体を使う・道具を使う」という場合には、「昔の人の体の使い方（それを前提とした道具の使い方）」という要素を避けて通ることができません。昔から体を使って特殊なことができる「偉人・達人」というのはいたわけで、体を用いる大和整体にもそうした要素が絡んでくるからです。

師の「本気の施術」を受けた人は少ないと思います。私が指導を受けてから亡くなるまでの間でそれを受けたのも、恐らく私一人ではないかと思っています。師は「医師」でしたので、病院で他の医師と同様に「現代医学に沿った医療行為」を行っていたのだそうです。その時点でほぼ大和整体の出番はないのですが、加えて交通事故によって右上半身があまり動かせない状態でした。事故で右肋骨の殆どが折れて治らない状態となってしまう、無理に動けば肋骨が内臓に刺さりかねない状態です。そのため長い時間の施術を行うことが難しい体でした。その師が、無理を押しして一度だけ私に

施術をして下さったのですが、その中身は私にとって「奇跡的な施術」と思えるものでした。

それは一言で言えば「ここまで人の体と手指が正確無比に動くのか」と思われるものです。明らかに私たちの知る「体の使い方」とは異なるものです。私はその体の使い方（体術）を教わりたかったのですが、残念ながら師は「天才＝長嶋さんタイプ」でした。というより、幼い頃から親に仕込まれているので、物心ついた頃にはもうできるようになっていたのでしょう。だから師にはそうした体の使い方も「当たり前」であり、理論化・言語化する術を持たなかったようです。私は仕方なく、師の体の使い方を自分なりに「詳細に分解整理」することで理解・習得しようと試みました。

長年かけて自分なりに「大体こうだろう」という体の使い方には辿り着いたのですが、師が亡くなるとそれが正しいのかの確認もできません。そこで私が求めたのは「昔の人の体の使い方がどこに残っていないか」ということです。結果的に、運良くそうした師に巡り会うことはできたのですが、その過程で分かったことは、そうした体の使い方への起源が思っていたよりもずっと古いものであったことです。

日本という国では、優れた力・能力を發揮するいわゆる「特別な力を持つ人々」の起源を追うことは簡単です。必ずそれらすべては一人の名前に

帰結するからです(名前は書きませんが少し調べればすぐに分かると思います)。(その人が実在したかどうかは置いておくことにして、そうしたすべての「力」は、その始祖から始まったと考えられています。この考えに習うなら、その人が有していたのは「人の意識や体の能力を最大限引き出す法」といったところでしょう。いわゆる「仙人や修験道の行者」などと考えて貰って構いません。昔から特別な力を使うことのできた偉人や達人というのは皆、そうした流れを汲むことで成立しているのだと思います(誰かに教わるなり自分で気付くなり)。

そうした力⇨能力は、自分の「体⇨物質」を扱うものと、「意識⇨非物質」を扱うものに分けて考えることができます。体と意識について、私たち現代人には理解しにくい「潜在能力を引き出す方法」といったところですね。例えば、「体⇨物質」の側でそうした能力を引き出すことができれば、それを「他人の体」にも作用させることができるようになります。これが分かりやすいのが「武術」です。「意識⇨非物質」の側は、最近では「エネルギー系」という概念が一般化しているので、そこに置き換えて貰えば分かりやすいと思います。どちらもうまく扱えるようになることで、通常の人が用い得ない不思議な力が発揮できるといっわけです。この二つを昔からの日本的な表現に置き換えるなら、物質側が「体術」、非物質⇨意識の側が「霊術」などとなるでしょうか。

最初はこれらに区分はなく、「すべてはひとつ」だったのだと思います。物質と非物質、昔はこの双方の垣根(境界の意識)がいまよりずっと低く「物質の変化が意識へ」「意識の変化が物質へ」と、相互の干渉が日常的に起こっていたのでしょう。そして修験道など、宗教的な要素を踏まえて特殊な鍛錬を積んだ人は、そうして「特別な力」を發揮していたのだと思います。ただそうした鍛錬も、大抵は「幼い頃から親に叩き込まれる」など、幼少期からの絶え間ない鍛錬が前提だったようです。仮に大人がそれを手にしようとしても、余程の才に恵まれるでもなければ難しかったことでしょう。

長い時間を経て、次第に「物質と非物質の垣根」が高くなり(両者は別のモノと捉えられるようになり)、また「幼い頃から親から」ではなくなり、私たちのように「ある程度の年齢になってから学び」ということが増えていく中では、次第にその「ひとつ⇨すべて」を得ることは難しくなります。そうした状況の中、「物質の扱い」「意識の扱い」のいずれかを学ぶという「分離(二分化)」が起こるのは自然なこと、現在ではそれが当然となっているのだと思います。

ただ、この二つに「序列」を設けるとすれば、それは技術の高度さで言えば「物質<非物質」となり、習得の順序でいえば「物質>非物質」となるのだと思います。これには「現代人の感覚」という背景もあるのだでしょう。

うが、「体を扱ふ」というのは誰しも敷居が低く、「意識を扱ふ」となるとその敷居が高く感じる筈です。ただ、「非物質を扱ふ」というのは非常に幅広い領域を扱ふものであり、それを正しく実践するには「それに耐えられるだけの強い肉体」が不可欠となります。そうなるべく、まずは「土台」たる体をうまく扱ふ（物質操作の基本）ことで強い体を作り、その体を土台として「非物質の領域」を扱ふというのが順当な考え方なのだと思います（これなら才なき人でも体が使えるようになれば非物質への道が開ける）。そして私は、師の独特な体の使い方は、こうした「物質⇨体術」に起源を葬るものであると考え、探求を続けてきました。

この辺りの話は、先代以外に、同様の「昔の人が用いた力」を継ぐ方々に、私が運良く師事できたことで辿り着いたたどり着いたものなので、それほど見当外れな話ではないと思います。大和医学が発生した年代を考えると、そうした「体術」の要素が当然の如く組み込まれていても不思議はありませんし、昔から残る（名前のない）「体術」の基本部分は、堀江先生の施術から私が「詳細に分解整理したもの」と多くが酷似しています。ただ、ここで勘違いして欲しくないのは、大和整体が目指すのは「昔の体術の実施（再現）」ではないということです。その要素を多分に含みはしますが、それが「役立つ」というだけで、そうした体術の完成自体を目的とするものではないのです（そうした体術ができなければ大和整体もできなかつたはず）。

## 五 体術＝全身の操作

最初に、大和整体の体の使い方、ここでは「体術」ではなく「体の操作」としておきます。「ここを」「体術」とすると、昔の体の使い方が不可欠となつてしまいます。「ここではそれらに習うことは重視しますが、その全てを必須とは考えないので、それを「体の操作」とします。この体の操作の基本となるのは「全身をひとつにまとめて使う」ということです。

よく体を動かす時に「全身運動」という表現を用いますが、「結果的に全身を使う」「ことごとく」「意図して全身を使う」「ことごとく全く違います。全身を等しく意識することで体の機能をも「均等」とし、その上で常に「体の全部を使って動く」というのが「全身をひとつにまとめて使う」ということです。こうした体の使い方では、どんな動作も「全身すべての機能を協力させる（全身の力を用いる）」となるので、現代的な体の使い方と比べれば「遥かに強い力」を発揮することが出来ます。

昔のよつ「す」すべてが人力「であつた頃では、どんな重いものを動かす。運ぶでも、それを人の力で行わなければなりません。それを可能とするには」といふすればもっと力を出せるか？「について、多くの工夫があつたことと思ひます。そうした中で「全身すべての力を用いる」ことができる人

は多くいた筈です（幼ければなおさら身に付きやすかつたことでしょう）。そして、これを実践する人の体の使い方というのは、「足・腰・肩・手・首」のいずれをとつても、いまとは大きく異なるものです（現代のアスリートでもその一部を用いることでより強い力を発揮するなどのケースはありますが断片的です）。ネットで有名な「たくさんの米俵を背負ったお婆さんの写真」というのがあります。ひとつ六十キロの米俵を五つ（計二百キロ）を背負つて立っているのですが、現代人がいくら体を鍛えたところで実践できるものではありません。こうした体の使い方は、戦前までは多くの場で残っていたようですが、戦後になつて「欧米的な体の使い方」が広く導入されたことで殆ど消え去つてしまつたこのことです。

ではこうした体の使い方（その中身）となるのですが、「ここで説明したのは」「三百キロの米俵を背負う方法」ではなく、その入り口の入り口部分の話です。まず、「全身をひとつにまとめて使う」ためには、「体の外側に張りをつくる」ということが不可欠です。これは全身の関節を適切に操作することで全身の表面に等しく「一定以上の張り」を作る作業です。全身を「ひとつの塊」にするようなもので、これによつて全身は強固に安定した状態となります。体というのはその各部をバラバラに使つてしまつたその力の上限は「各部が有する力のみ」となります。しかし全身を一つにまとめると、そこから発揮できる力の上限は「全身すべての力」となるので、より強い力を発揮できるようになります。そしてこの実践は「適切な

身体操作」の結果なので、「鍛えあげた筋力による力」などとは異質のもので、(全身で均一な力の発揮なので「部分の負担」は少ない)。まずは「姿勢の安定」という程度に考えて下さい。

こうした体の使い方が強い力を発揮できる理由の一つは、「すべての力を足から発する」ことにあります。地面と繋がる足を起點として、そこから発した力が体幹へ伝わり、上肢へと伝わるのです。腕というのはいくら鍛えても、それほど強い力を発揮することはできません。しかし足の力が腕に伝わるとなれば、腕単体では発揮しえない力が使えるようになります。「腕力」の上限は低くとも、「足からの力」の上限はすっと高いものです(足を鍛えればなおさら)。実際は「全身の隅々まで力を込める」ことで、「全身すべてが強い」という状態となるため、腕も強くなるのだと考えて貰った方が分かりやすいかと思います。

「全身をひとつにまとめて使う」ということの最大の利点は、武術などで言えば「体をひとつの塊として動かせる」ことにあります。仮に体重六十キロの人が、全身が凍ったように体をカチカチに固めて「体当たり」をしたとします。それは「六十キロの石(氷)の塊が飛んでくる」ようなものです。ぶつかられた側は、当たりどころによっては骨折などの大ケガとなります。昔の武術ではこうした攻撃が多く見られるのですが(拳を突き出しつつ全身を固めて突進するなど)、私たちがこれを行ってもそうし

た威力にはなりません。体のあちこちに「(無意識レベルの)弛み」があり、その弛みによって折角の「カチ衝撃」を弱めてしまうからです。全身の動きを正しく制御するというのは、非常に難しいことです。しかし「全身を正しくひとつにまとめる」ということができたなら、それだけで普通の体の使い方ではできないことが数多くできるようになります。

次は、この状態のまま体を動かしていきます。とはいえ、全身の張りを保ったまま体を動かすことになるので「自在に動ける」ということにはなりません。ここでの「動き」とは、最初に全身に張りを作った状態、その性質を維持したままで行わねばならないので、そこで可能な動きには一定の制限が伴います。こうした体の動きを言葉で表現すると、それは「体と四一  
いうひとつの塊がその形を変える」といった風になります。全身の外側を均等に張り、その状態を維持できる範囲で体を動かすのです。もちろんこの状態では「手足をバタバタさせる」といった大きな動きは叶いません。目的とする体の動きを、最小の動作で成立させる必要があります(無駄な動きは行わない)。

私たちの体というのは、あちこちが自在に動きます(動かせません)。しかしそこに全体性(統一性)が伴わなければ、そこで発揮できる力の上限は「各部が有する力」のみとなります。そして「全身の動きを正しく制御する(正確に動かす)」には、ただ「全部を動かす」だけでは効率が悪く

なってしまう。各部の機能から「動かすべき部位」「動かすべきでない部位」を明確に定め、「余計な動きという無駄」をなくす必要があるのです。簡単には、体の支柱である体幹＝脊椎はあまり動かさず、手足のみを動かすことが基本です。とはいえ、これだけでは「手足だけが動く」となってしまう。実際は「まず体幹を固め手足を動かす」「四肢をその土台である肩甲骨や腸骨から動かす（四肢の根元を動かす）」「固めた体幹を僅かに動かしその力を四肢へと伝える」などの段階設定が必要です。動かすべき部位・動かすべきでない部位を明確に区分することで、最初の「体の形」の性質を要所に残しつつ「形を変えるように動く」のです。またこうした体の使い方は、最初の時点では相應の力を必要とするものの、そこからの動きは「形を変える（体の内部に有する力の向きを変える）」だけでなく、体を動かすのに大きな力を必要としません。

こうした体の使い方では重要なのは、体の「静」と「動」を明確に分けることです。私たちの体には、意識・無意識による様々な緊張が存在します。自分では「全身を止めている」と思っている、無意識レベルでどこかが動いてしまう「となれば正しい」「静」とはなりません。これは「全身を動かす」でも同じことで、無意識レベルで「動かないところ」があれば、正しい「動」とはなりません。そうした本来なら制御できない「無意識の動き」を、体の操作に力をつけて意識化すべきところまで引き上げ、そこで初めて「全身を止める」「全身を動かす」ことが可能となります。

もちろん体の細部、その隅々をすべて意識化するのは難しく、その実践には長い年月が必要ですが、まずは「ほぼ全身を意識化して動かし・止められる」という程度でも、従来の体の使い方とは一線を画するものとなり得ます。

## 六 体術二部分の操作

先に「全身が動く」ということは、各部の機能から「動かすべき部位」「動かすべきでない部位」を明確に定め、「余計な動き」という無駄をなくすことができました。これは「全身のすべてを動かす」「ここを前提としてつと、各部に」「動きの大小」という偏差を設けるということとです。重要なのは「全身のすべてを動かせること」ですが、これを効率よく実践するために各部に「動きの濃淡」を設けるのです。「全身すべてが等しく動く」というのは、それはそれでひとつの理想ですが、その動きを制御する「脳」にどうみれば「概に良いこととは言えません」。

「脳」が体の動きを管理・制御する時、すべての部位が等しく動いてしまつと、そこには脳が体を管理・制御するための「基準」がありません(すべてが「動」であるため)。そこで「体幹はあまり動かさず手足を」とすると、それは「体幹を基準として手足を動かす」という意味となります。私たちの体というのは「静と動」で成立しています。これは「感覚神経と運動神経」に置き換えても同じです。「自身の体がどついつい状態にあるか」を正確に知るには、体を静止(静)させれば分かります。静止により「運動神経」の活動が抑えられた結果として「感覚神経」の活動が活性化されるからです。そうして「自分の体の状態が分かった」となれば、そこから行

う「動き」も比較的正確なものとなります。逆に「動」の状態ばかりが長く続くと次第に間違い(誤作動)が増えるのですが、そうした場合はまた「静止」に戻れば感覚を正常化することができます。動いて・休むの繰り返しという、動物にとっては当たり前のことです。

ただ、これには「中間」を設けることも可能です。全身が動いている最中に「ここは動寄りに機能させる」「ここは静寄りに機能させる」という差を設けるのです。仮に「体幹を静寄り」「四肢を動寄り」とさせたなら、体幹側では感覚神経が相応に活性化できるので、動きの中でもある程度の状態把握が可能です。そしてその情報を基準として、より四肢を正確に動かすことができます。実際に古い武術などでは「体幹を動かさずに四肢を動かす」という動作は当たり前となっています(姿勢を崩さずに動く)。

「ここまでが」「全身を動かす」「この中身だとすれば、次は」「部分を動かす」です。私たちが「紙に文字を書く」という時、誰も「字を書く側の腕」以外のすべてを静止させます。腕以外の全身が静止していればこそ、そこを「基準」として残る腕を正確に動かせるからです。これと同じことを、先の「全身をひとつにまとめた状態」から実践します。今度は体のどこかを「意図的に止める(静)」のです。動きの中でどこかを静止させることの利点は「力の発揮」と「力の制御」という二点です。体は各部が等しく動いてしまつと「全身の繋がりの」といつ点では強い力を発揮すること

ができますが、そこで可能となる動作は常に周囲の動きと絡む「相対的」なものでしかありません。「動物的な動き」という点では理想であるものの、「文字を書く」といった正確な動作は望めないのです。

「体のどこかを止める」ということは、そこが全身を動かす際の「基準」になり得るといふことです。その静止が絶対的なものであるほど、その基準も信頼できるものとなります。これは先の「動物的な動き」に対して、意図的な操作を行う「人間的・理性的な動き（体の使い方）」です。どこかを止めるということは、その静止を土台に次の動きに強い力を伴わせることも可能です。単純には「左半身を静止させて右半身だけを動かす」とすれば、左半身を強固に固定して「安定した土台」とし、その土台から右半身は強い力を自在に発揮することができます。この「止める（静止）」は、どこかの一点でもどこかの範囲でもみずく、これをうまく使うこと「強い力」と「正確な動き」の双方を実践することができます。

こうした動きは、特に「対人間」に対して非常に有効です。例えば相手に腕を掴まれた時に、これを腕で振りほどこうとしても、相手の力が強ければなかなかほどけません。しかし腕を動かさず、腕から遠いどこかから力Ⅱ動きを発して、その力を腕に伝達させると、割と簡単にほどくことができます。私たちは対人の場合、「相手の動き」に合わせて動きます。それが「握っている腕」から発する力や動きであれば、それを正確に読み取

り反応することができます。しかしこれが「別の遠いどこか」になる、腕自体には何の変化もないのに「結果として腕が動く」となるので、うまく反応（対応）することができません。こうした方法は「武術の達人」と呼ばれる人が多用する方法ですが、施術でも「手技Ⅱ刺激の出所を読まない」という方法で非常に有効です。

体の動きというのは、それを管理・制御する脳にとって、単純であればあるほど「無駄がない動き」となります。そのためには目的とする動作をいかに単純化するかの工夫が重要です。そしてこの「無駄がない」ということは、全身の力をより有効に使う（強い力を発揮すること）にも繋がっています。これが「動物的・自然な動き」であるとすれば、そこに意図的な操作を加えることで「動物的・自然な動き」の性質を有しつつも、より複雑・正確な動きを行うことも可能です。そしてこれらは相反するものではありません。「体を全体として使う」ということは重要ですが、「部分」を思うように動かす」ということは、その部分をより繊細かつ正確に動かすための訓練でもあります。そして体のあらゆる「部分」を繊細かつ正確に動かせるようになるということは、結果的に「体の全体をより繊細かつ正確に動かせる」ということに繋がっていきます。互いが互いの機能を補完しつつ、結果的に全身の機能を向上させていくことができるのです。

## 七 手指の操作と扱う対象

ここまでの説明は「昔の体の使い方」を前提とした体の操法についてでしたが、ここからはよりの施術に寄った話となります。私たちが行うのは施術⇨手技なので、「手先をどう使うか」は重要です。ただ、これまでの説明で「全身をひとつにまとめる」や「全身が等しく強い」としてきた手前、ここでは「手先を好きに動かす」ことができません。全身のバランスを崩さぬよう手指を使う必要があります。大和整体にはそのための基本ルールがあり、これを「按法八療」といいます。簡単には、手技による刺激を「点・線・面」などの形（刺激の形状）に区分するのですが、どんな刺激も必ずこれらのルールに沿って行います。

按法八療というのは「面・尖・側・移」という四つの大按法と、「連続・断続」という二つの小按法の組み合わせです。これを簡単に説明するには「ジャンケン」が適しており、「面・尖・側」はジャンケンの「パー・グー・チョキ」に相当します。「面は対象を包み込むような広範囲の刺激」「尖は力を一点集中させた（針で刺すような）刺激」「側は刃物で切り裂くような細い刺激」です。残る「移」については「刺激を飛ばす」という表現になるのですが、これは「面・尖・側」を扱えるようになってからの話なのでここでは割愛させて頂きます。これらの刺激はそれぞれ「連続⇨持続

庄」か「断続⇨断続刺激」のいずれかで用いていきます。

これらの手技は、これまでの体の使い方と、必要とする刺激に適した手の形を作ること（その形に全身の力を収束させること）で可能となります。つまりは「正確な身体操作」を前提として、「点・線・面」といった幾何学的（機械的）な刺激を実践するのです。私たちの手は、その柔軟性によって機械にはできない「柔らかい刺激」を可能としますが、最初はこれを排し、ただ「機械的のような強く安定した力の発揮」と「機械のような正確さ」による刺激を実践していきます（これが可能となれば「正確さを伴った柔らかい刺激」をも扱えるようにする）。

体に手指で刺激を加えるという時、その刺激には人の体ゆえの「不安定さ⇨曖昧さ」が伴うものです。通常、人の体は機械ほど正確な刺激を実施・維持することは叶いません。もちろん、そうした不安定さの中には生物ゆえの「揺らぎ」という面もあり、だからこそ「相手の揺らぎに合わせる」といったことも可能となります。しかし、何らかの方法を用いて「機械的な正確さ」で刺激を加えることが可能なら、「そうした刺激にしかできないこと」もあるわけで、まずはそちらを優先して習得するのです（そうした刺激を柔らかく柔軟にしていることは後から幾らでも可能）。まずは上場にある「ロボットアーム」のように、力強さと同時に正確かつ繊細さを併せ持つ手技の実践を優先するのです。

この按法八療を用いる大和整体の手技は、体の表面はもちろんのこと、どんな深部であれ「対象に自在に刺激を加える」ことを前提とします。そしてそれを可能とするのは大和整体の「体は繊維構造でできている」という考え方です。体のすべて（あらゆる器官・組織）を「細い糸の束」と捉えるのですが、その仕組みが糸の集まりであれば、糸同士の間には「繊維の隙間」があることとなります。この隙間に沿って手技を行う限りは、体の深奥でも直接触れて刺激を加えることができるのです。もちろん体の組織すべてを直接触れて扱えるわけではありませんが、直接触れることができないものについては「関節な力を加える」などの方法で対応していきます。つまり体のどんな器官・組織であれ、手技による刺激を加える対象となり得るのです。

そしてここでは体の不調というものを「繊維系が絡んだ状態」とします。本来、正常に機能すべき体の内部に異常なり誤作動なりが起きてしまい、その状態が持続してしまう（治らない）というのが愁訴であり疾病です。そうした問題を「糸が絡んだ状態」と捉えるなら、それを治す方法は「絡んだ糸を解きほぐす」ことです。これは大和整体の施術、その一部を比喩的に表現しているのですが、こう考えることで施術というものは非常にシンプルとなります（あまり小難しく考えない）。そしてそこにどんな深部の糸の絡まりでも扱える按法八療があるのです。つまりはこれらを前提とする限り、大和整体の施術は「どんな不調であれ対応することが

可能」です。これは用いる技術自体は単純でも、施術者の技量次第でより多くの体の不調を扱うことができるという意味です。そして「大和整体の施術の基本」を簡単に説明するなら、これで「以上（終）」となります。

私が認識している大和整体というのは、「全身の使い方」と「糸の絡みを解くための按法八療」、これらの基本がすべてなのです。問題はそれらを「どう使うか」です。大和医学・整体はとにかく「個」を重んじるので、それをどう使い、活かしていくかは「その人次第」です。もちろん師は大和整体の施術・手技の完成形ですが、先にも書いたように、師はそれを真似ることは許さず「自分で見つける」と言うのです。ですから私が受けた大和整体の指導も、私なりに構築したものを師に「これで合っていますか？」と確認する、その繰り返しでした（自分の考えや感覚が大和整体とズレていないかを確認する）。

大和整体の施術・手技の考え方は、それが単純な分だけ応用の幅が広くなります。そしてやっていくほどそこにいくつもの段階設定があることに気付かされます。実際にやってみると、誰もまずはその対象を「扱いやすい運動器（体壁系）」とします。それが長年かけて「運動器なら大体ほとんどどこができる」となれば、次に対象となるのは「内臓（内臓系）」で、これもほどこるようになるので、そこでようやく「体の内外を等しく扱う」ことができるようになります（初期段階の全身機能の均等化）。そうなる

と、次は循環（血管の機能）レベルの微細な問題が浮き出てくるので、これをほどく対象に。こうした感覚に慣れるとそれまで扱っていた体壁系・内臓系をより深く見られるようになるので、そこに「これまで気付かなかったほどぐへべき多くの対象」が見えてくるようになります。そしてそれらも解けるようになるので…、と言った具合に延々と施術の対象が広がっていくのです。もちろんそれらを扱うには、按法八療の応用をひたすら拡大して行かざるを得ません。どこまで行っても「ゴールのない道筋が続きます（そのなると「繊維の先にあるもの」も見えてきます）。

これは、通常では気づき得ないような「体の些細な問題」をひたすら掘り下げていくという作業です。こう書くと「そんな些細な問題までを逐一扱う必要があるのか？」と思う方もおられるかと思いますが、それに対する私の回答は「ついで、そのひとつは」とんな問題も最初はほんの些細な出来事から始まる「です。例えば悪いのですが、大きな戦争も最初のきっかけは「ほんの些細な出来事」から起こります。体の愁訴・疾病の解消に、必ずしも「根本原因の解消」が必要というわけではないのですが、「何をやっても治らない」というケースでは対象を「根本原因」まで掘り下げることは非常に有効です。時には「右足が動かなかった原因がこんな些細な問題だったなんて…」といったこともあります。

もうひとつは、大和整体が「一人の人間を生かすための技術」であると

いう点です。例えば百人の患者さんを相手に、長い時間がかかっても九人までは愁訴・疾病の解消ができたとします。施術には「相性」もありますし、一人の人間がすべての人を治すなど無理なことです。問題は、その「治らなかった一人」が「生かしたい対象（武家の長子）」であった場合です。これを私は「その一人が自分の家族などの身内だったらどうしますか？」と説明します。これを治すためには、通常では必要のない範囲まで、施術の対象を深く掘り下げる必要があるわけで、大和整体ではそこを「些細な問題」と軽視することはできないのです。

ただ、こうした施術は「好み」が大きく分かれる部分だと思っています。一般的な「多くの人を治したい」というよりは「体のことを深く知りたい」という人の方が向いています。「治す」という成果よりも、「自分なりの探求」に重きを置く人に向いている療法です。実際に愁訴・疾病を、私よりうまく・早く治せる方はたくさんおられます。大和整体が目的とするのは「繊維単位の機能の正常化」であり、そこで「治る」ということはその結果に過ぎません。「治す」こと自体を目的とはしていません（施術の結果として体が治る＝体自身に治させる）。一人の人間の体をひたすら深く扱う、それが大和整体の根本となる施術観です。

## 八 応用

大和整体は、施術者の「個」を前提として基本的な手技（按法八療）をどう応用していくかが重要となる療法であることは説明しました。その中では必然的に「駆け引き」という要素が多くなってきました。行う施術が単純なものである以上、その出来（良し悪し）は扱う人によって大きく変わります。そしてこの辺りは「戦術・戦略」といった話となります。施術の技術を高め、これをどう活かしていくかが「戦術」であり、その戦術を活かすための大局的な施術の捉え方（作戦の練り方）が「戦略」となります。大和医学が武家に伝わる療法である以上、私はその考え方＝背景に「戦」の概念があるのは当然だと思えます。

これを表すものとして、「按法八療」の用法としての「療伝の側」という考え方があります。療伝の側は「放射の側」「蝸牛の側」「末広の側」「並列の側」の四つからなるのですが、大和整体の「施術の組み立て」の基本です。放射は文字通り、全方向へ放射状に広がる力の流れで、それは拡散でも収束でもありません。蝸牛は螺旋方向への力の拡散と収束、末広は一方向に対する拡散と収束、並列は並列に並び点での力の移動を表します。これを基本となる力の流れ（力のあり方）として、按法八療の用法として用いていきます。もちろんこれは「基本」なので、幾らでもその応用が利き

ます（戦での「陣形」などはそのよい応用例となります）。

「個」を扱う以上、大和医学・整体の施術は「個対個」の駆け引きの中でしか成立しません。「これを行えば治る」といった正解はなく、相手の個と私という個の間に生じる関係性、これを前提として「互いの中でしか分かり得ない（成立し得ない）内容の施術」から、その効果が定まるのです。これを私は「人との会話と同じ」と説明しています。誰かと会話する時には「相手に合わせる」ことが基本ですが、時には「あえて相手に合わせない」ことが必要な時もあります。また相手の話していることが真実か否かの「虚実を見抜く」ことも重要ですし、時には「あえて騙す」ことが必要な時もあります。人との会話がこうした駆け引きなしには成立しえないように、施術もまた「対話＝駆け引き」を抜きに語ることはできません。

体は物質＝モノです。これを、機械を扱うように「必要なこと（正しいこと）を行えば済むれば良い」と考えるのは間違いだとは思いません。しかし体というものを「その人の意識と共生関係にあるもの」と捉えるなら「意識＝体」となるわけで、体だけを別に考えることはできません。施術者なら誰しも「施術による体の大きな変化が意識の変化に直結する」という経験はあると思います。「意識＝体」であるなら、意識の変化は必ず体の変化として現れ、体の変化は必ず意識の変化として現れるべきです（ここが分離していることが多くの愁訴・疾病の根本原因）。こうした考



だけ変える)。そうして徐々に「体がうまく機能しやすい方向」へと誘導  
していけば、いずれは自力で良い方向へと向かってくれるようになります。

---

## 九 まとめ

「ここまでの内容で、だいたい」言っておきたいこと」は書いたつもりです。そして「大和整体は感覚的な要素が強い療法」であることも伝わったと思います。ただしこれはあくまで「私が伝えることのできる大和整体」であり、実際に「師が見ていたもの」と「私が見ているもの」には、技量の高低以前に大きな違いがあると思います。

そもそも扱う対象が物質であれ非物質であれ、昔からの一子相伝の技術体系ではそれを「幼い頃から習わせる」のが基本であったようです。武術であれば「三才から」というのは常識だったようです、大和整体の師であった堀江糾医師は「小学校の頃には父の代わりに往診をしていた」と話していました。一般的な常識・感覚が身に付いてしまう前、つまり物心がつくと同時に、こうした「技術」を習得させてしまうのです（幼いうちに染め上げてしまう）。「手で対話する」という感覚を幼い頃に手に入れ、そうした感覚でしか人の体を捉えたことがない師が、体に対して何をどう感じていたのかは私には想像できません。それこそ「一子相伝によってしか見ることのできない景色」を見ていたのだと思います。そしてここでの説明は、先の「物質・非物質」という区分のうち「物質⇄体術」に限ったものですが、師自身はもう一方の「非物質」の側も扱っていたように思います

す（当時の私には分かりかねる領域でした）。

私からすれば「一子相伝という環境」は「才能」よりも上なのだと思えます。私たちが「難しい」と思うことでも、当人からしてみれば「それしか知らない⇄当然」なわけで、それは言うてみれば、濁りのない「純血種」のようなものです。そうした人の「完成度の高さ」と比べれば、成人してからそれら習う私たちがいくら努力を重ねても、とても及ぶものではありません。当然それを引き継いだ私も、その一部を不完全に継いでいるに過ぎません。とはいえ、それを私が後ろ向きに感じているというわけでもありません。大切なのは「何を引き継ぎ・残すか」です。

これまで書いてきたように、私の解釈では古い療術(何らかの技術体系)というのは、もともとは「物質と非物質の混在」で成り立っていたのだと思います（昔は双方の境界そのものが曖昧であったため）。しかし現代人の感覚で入りやすいのは「物質側」であり、「非物質側」を扱うには「相應の才」が必要と捉えられています。よって私はこれらを習得するなら「物質⇄体術⇄非物質」が適すると考えます。そして「非物質」の部分は、無知な私などが語らずとも、詳しい専門の方々がおられます。才ある方なら、そうして双方⇄すべてを手にすることも可能でしょう。しかし現実に消えかかっているのはその入り口たる「物質⇄体術」なわけで、これを残すことには大きな意義があるのだと思います。そしてそれを実践している身と

しては、そこに「体術だけで十分（お腹いっぱい）」という思いもあります。

療術でも武術でもその行き着く先、つまり「その完成形」があるとしても、それはひとつではないと思います。どんな技術体系もその人の「個」に由来する限りは「その人なりの完成形」となります。そしてそうした技術を次代に残す時、それを「完全な形で継ぐ」ことも難しいのだと思います。これは武術の師の受け売りですが、技術の継承というのは大抵「六分」程度となるそうです。ある優れた者によって「ある技術体系が完成した」として、それを次代の者が継げるのは全体の六分程度なのだそうです。「稀代の天才が生み出した技術」を次の代が受け継ぐのですから、妥当な数字だと思います。そして次の代でまた「六分」となり、どんなに優れた技術体系も次第に薄まっていくのだそうです。ただ、その過程で「不足分を補ってしまつ天才」が現れることがあれば、そこで多少の相違はあっても「完成形」となり、また続いていくのだそうです。そして私の役割は大和整体、その「六分（主に体術）」を伝え残すことだと思います。

私の考える大和医学・大和整体というのは「知識・技術の集大成」というよりは「古（いにしえ）の思想」なのだと思います。「個の特異性を重んじる（個を感覚で捉える）」「体自身に治させる」「八分を良しとして六分を最良とす」「自然に沿って治す」などなど。こうした考え方＝理念が

先であり、そこに必要もしくは適した技術を用いることで「大和医学・大和整体という療法」が成立します。ただそうした思想（理念）も、頭で理解することに意味はありません。それが「経験医学」である以上、経験の中でしか掴み得ないものです（実際にやってみるとどれも非常に難しいのです）。しかしそれらを掴むことができれば、そこから技術を広げていくことも可能となります。

昔に成立した技術体系を「正しく理解」するために必要なのは、昔の人の感覚を理解することだと思います。昔に読んだ歴史の本に「歴史を正しく理解するには、当時の人たちの生活の中に自分を置き（想像し）、同じ目線に立たねばならない」とありました（文章はワロ覚えですが）。<sup>二</sup>簡単には「外から見て分かった気になってはいけない」といった意味の言葉です。幸い大和整体には、現代人には異質と思える「体を繊維で捉える」という考え方があります。現代医学の知識は忘れ、実際に「体を繊維で扱つ」ということに没頭していると、その中でこそ見えてくるものがあり、時折「昔の人は体をこんな風に捉えていたのかな？」と思わされる時があります。昔の人の「技術に寄り沿う」のではなく「視点に寄り沿う」といったところでは、そうした視点さえ伝えることができれば、例えその内容が「六分」であっても大和整体の核心は伝えることができるのだと思うのです。

「昔に成立した技術体系」というのは大抵、多くの人に「残すべき」と

敬われると同時に、現代人の感覚から否定されるものでもあります。武術などで言えば、昔の武術の型稽古などは「実践では役に立たない」などと否定されがちです。私などはそうした「昔の人の知恵」といった類が好きなのですが、それを否定する人の気持ちも分かります。ただ、それらの価値を決めるのはあくまで「個人」であり、そこに共通の正解は必要ありません。それを「役立つ」と感じる人にとってのみ価値があればいいのです。そうした意味では、私がすべきことは「大和全体の価値を高める」ことではなく、「ただ残す」こととなります。

実際に私がそれらを残すのは、こうした文面ではなく「直接の指導の場」です。しかしここに書いた内容から、その一部でも「役立つ」と思って貰えることがあれば、それだけで残した価値はあると思いますし、そうした繋がりがいつか「大和全体を必要とする誰か（大和全体が必要とする誰か）」へと届いてくれるれば良いのだと考えています。そして、ここに書いた内容を通して誰かに「大和全体という療法はちょっと楽しそうだ」と思って貰えたなら、それで私の目的は果たせたのだと思います。